

秦 聡孝 教授 ▶ ロボット支援下手術

普及するロボット手術

附属病院にda Vinci®が導入されてから10年が経った現在、先日から2台目のロボットとなるhinotori™の稼働も始まり、泌尿器科、消化器外科、呼吸器外科、産婦人科の4診療科を中心に保険適用のロボット支援下手術が広がっている。その中で最も件数が多いのは泌尿器科であり、2012年以降、前立腺全摘、腎部分切除、膀胱全摘などを合わせて約600件が行われた。その執刀をはじめ、学生たちの教育にも力を注いでいるのが腎泌尿器外科学講座の秦聡孝教授だ。

そもそも日本で



ロボット支援下で 進化する低侵襲手術

医療ロボットの開発が進む中、大分大学が誇る腹腔鏡手術も最先端のロボット支援下手術に変わってきた。その過渡期から携わっている秦聡孝教授に、メリットと課題をお話いただいた。

da Vinci®が承認されたのは2009年のこと。当時、国内ではその導入に反対意見もあったが、今ではすべての国公立大学



▲hinotori™の操作を訓練する秦教授。従来のロボットに通信機能が加わり、手術中のトラブルに備えメーカーと遠隔で情報が共有できる

で運用されているほどに普及。ロボット手術は傷や手術中の出血量、回復までの期間が少なく済み、患者へのリスクも負担もかなり軽減されることはよく知られている。秦教授は、執刀側のメリットをこう語る。

「手で長い棒を持って行う従来の腹腔鏡手術は、例えるなら竹馬に乗っている感覚。慣れるまでに時間が必要です。対して

ロボットは自分の手を使っているように繊細に動き、比較的直感で操作できます。短期間の訓練で慣れてくるので、若手の習得も早いです」。

さらに、内視鏡やロボットで行う手術は機材の先端に付いたカメラで体内を映すため、手技が動画で残せるのも特徴。そのため、世界的権威の実技が公開されることもある。開腹手術の場合は手術台のまわりで覗き込むようにして学んでいた手技が、今は世界中どこにいても、そして誰でもパソコンの前で学べるのだ。「動画に倣って新しい術式が次々に試せますし、自ら工夫し応用もできます。da Vinci®の場合は3D画像でも保存されるので、再現性

も高い。今や、大分県にいても世界レベルの手術が提供できる時代なのです」。秦教授自身も2021年、膀胱全摘手術の一つの方法として「完全体腔内での尿路変更術」を開発し、世界に発信している。

夢ある若者を求む！

そのメリットの多さから、ロボット手術を希望する人は年々増加しており、県内にも多くの患者が待機している状況。そのニーズに応えるためにも「人材の確保、そして若手の育成が急務だ」と課題を挙げる秦教授だ。「これから医師を目指す学生たちは、もはや医療ロボットとの接点を避けては通れないでしょう。だからこそ、早い時期から積極的に習得した方がいい」とアドバイスを送る。それが叶うのが大分大学の医学部であり、秦教授は多くの県出身者に地元での活躍を願っている。自らも大分県出身者。地元で働くことは、医師と患者双方にとって良いことだと持論を語る。



▲医学部の「スキルラボセンター」で、学生たちに手技を教える様子

「患者さんが暮らす地域を知っていることは何よりの強みです。病状はもちろん、我々にとっては患者さんの背景を知ること大切だからです。そのためにはコミュニケーションが欠かせないので、診察中の私は大分弁のネイティブスピーカー(笑)。するとすぐに雰囲気が打ち解けるんです」。

ただし、視野の狭い井の中の蛙にはなあってほしくないとも言う。基盤は大分に置きながら世界を見渡し、修業を積むことでスキルアップができる。それでこそ地域

に医療を還元できるからだ。東京の国立がんセンター中央病院やアメリカの大学で勤務した自身の経験からも、確信をもってそう言えるという。熱望するのは、人間力の備わった人材。都会では医師が充足傾向にあり、逆に地方は不足している昨今、「ロボット手術にはまだまだ将来性がある。ぜひ夢ある若者にこれからの大分の医療を支えてほしいと思います」。

なお、8月には「低侵襲手術センター」が新設されたばかり。今後はより組織的に教育、運用、安全性をマネジメントしていく。



医学部
腎泌尿器外科学講座
秦 聡孝 教授

1999年大分医科大学医学部卒業。大分大学医学部大学院医学研究科修了。国立がんセンター中央病院レジデント、南カリフォルニア大学泌尿器科リサーチフェローを経て母校に戻り、大分の医療レベルアップに尽力。